

2021 年度高等教育開発協会研究申請書

2021 年 5 月 31 日

I. 研究名称

カリキュラム再開発のためのオルタナティブな理論構築研究

ーコンセプト・ベースド・カリキュラムとその実践の可視化とモデル化ー

II. 研究代表者

佐藤浩章（大阪大学・全学教育推進機構・准教授）

III. 研究組織

区分	氏名	所属	役割
研究代表者	佐藤浩章	大阪大学・全学教育推進機構・准教授	総括
研究分担者	榊原暢久	芝浦工業大学・教育イノベーション推進センター・教授	モデル化
	西野毅朗	京都橘大学・教育開発支援センター・講師	モデル化
	桑木康宏	学びと成長しくみデザイン研究所・所長	モデル化
	遠藤みゆき	関西学院大学・教職教育研究センター・准教授（非会員）	モデル化
	根岸千悠	大阪大学・全学教育推進機構・特任助教（非会員）	モデル化
	山本秀樹	AMS 合同会社・代表（非会員）	実践可視化
	山本達也	清泉女子大学文学部地球市民学科・教授（非会員）	実践可視化
	青山貴子	山梨学院大学・副学長／学習教育開発センター副センター長（非会員）	実践可視化

IV. 研究期間

2021 年度～2022 年度

V. 研究の背景と目的

本研究の目的は、カリキュラム再開発のためのオルタナティブな理論を構築することである。具体的には、コンセプト・ベースド・カリキュラムとその大学における実践を可視化すること、ならびにそのモデル化を行う。これによって、FD 担当者がカリキュラム再構築に取り組む際に参照する指針づくりを目指す。

FD は、マイクロ・ミドル・マクロの3つのレベルに分類されるが（佐藤ら 2016）、中でも「最も負荷が高く困難を伴うのがミドル・レベルのFD」（佐藤 2015）、つまりカリキュラム・プログラムに関するFDである。一方「成功すればマイクロ・マクロ・レベルのFDを同時に展開させることができ、ダイナミックな改革が可能となる」（同上）。

マイクロ・レベルFDの背景的理論は、教育方法学やインストラクショナル・デザインにおける研究知見として数多く存在している。これに比べて、ミドル・レベルFDの背景的理論は少ない。1949年にタイラーが提唱した理論や、第二次世界対戦後デミングに影響されて日本で普及した品質管理手法であるPDCAサイクルは、そうした理論の一つである。日本の大学で2010年代に入って取り込まれてきた、3つのポリシーの策定とその公表ならびに学修成果の可視化において支柱となっているのはこれらの理論である。しかしながら、この取り組みは、現存するカリキュラムにポリシーを後付けしたり、カリキュラム上の学修成果に対する関心を高めたりすることには成功したものの、カリキュラム本体を再構築するものには至っていないように思われる。

エリクソンら（2020）は、こうした伝統的なカリキュラム設計理論は2次元モデルに依拠しているとし、そのオルタナティブとして、概念理解に基盤を置く3次元モデルであるコンセプト・ベースド・カリキュラム（Concept-Based Curriculum、以下

CBC) を提唱している。CBC は、すでに米国の初中等教育現場やインターナショナル・バカロレアのカリキュラムとして実装されている。本研究では、数少ない国内外の大学における実装事例の分析を通して CBC の有用性や有効性を検証したい。

VI. 研究の計画

2021 年度は、本研究の理論に関する研究会を 2 回開催する。1 回目はカリキュラムマネジメント、2 回目は CBCI をテーマとする。また、CBCI に基づくカリキュラム再構築に取り組む米国ミネルバ大学ならびに清泉女子大学の関係者にヒアリング調査を行い、初回のモデル化を試みる。2022 年度は、山梨学院大学の関係者にヒアリング調査を行い、モデル化を試みる。そして、2 年間の研究成果をまとめる。

VII. 助成金の使用計画

年度	物品費	旅費	人件費・謝金	その他	合計
2021 年度	100,000		50,000		150,000
2022 年度	50,000		50,000	50,000	150,000

(円)

VIII. 成果の公表方法

2021 年度には、中間報告を JAED 総会ならびに研究会時に行う。また、2022 年度には、中間報告を大学教育学会大会、最終報告を JAED 総会にて行う。最終報告は PDF 化して JAED ウェブサイト上で公開する。